

# 平城宮跡第120次発掘調査現地説明会資料

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

1980. 3. 8

伊村雅治

## はじめに

奈良国立文化財研究所は、昭和42年の第44次調査以来、平城宮東院の東南隅においてこれまで99次、110次の前後3次にわたる発掘調査を実施した。この結果この地域に奈良時代前半において大規模な園池が造成され、池の周囲にはこの池と密接な関係をもった諸施設が配されていたこと、北岸にはこの園池造成以前にもすでに建物の造営があり、東院地区の整備が和銅遷都以後かなり早い時期に行われたこと、園池造営以後は周囲を堀で囲み、南方の池と一体となった建物群が存在したことなどが明らかにされている。また宮内ばかりでなく、宮をとりまく堀地部分、この地区と接する二条条間大路と東一坊坊間大路との交点付近の様相などもこれらの発掘調査によって知られるようになった。

今回の発掘調査は従来の調査地で未確認であった園池西側の汀線を確認すること、その西岸地域の性格を解明することを目的として行った。また東院の南面大垣とその外側の堀地や二条条間大路の幅員についても従来の成果を補足する目的で調査を行った。

調査は79年12月24日から開始され、現在進行中である。発掘面積は2500㎡である。

## 遺構の概要

これまでに確認された奈良時代の遺構には、建物7棟、堀10条、溝12条、井戸1基、園池1がある。建物、堀にはすべて掘立柱を用いる。

これらの遺構を大まかに次の6時期に区分した。園池SG5800とその関連施設、大垣・堀地部分については別に述べる。

**A期** 主発掘区中央に東西棟建物SB10があり、建物前面には井戸SE11が掘られる。この井戸は平面が長方形をしており、宮内では類例が少ない。SB24は発掘区外にはみ出す南北棟建物の東側柱である可能性が高い。

**B期** 東西棟建物SB12があり、その西側を堀SA17が仕切る。SB12は雨落溝SD14を持ち、SD14は建物の東で折れ曲がって南流し、大垣下を暗渠でぬけて宮外へ流れ出す。

**C期** 堀SA08とこれにとりつく逆L字形の堀囲いSA22がある。SA22の内側にあってSD19がめぐり、堀と溝の間には礎敷SX23が設けられる。SX23は堀SA22の柱筋に目地をいれた珍しい手法を持つ。堀SA08の南方は未検出であるが、この堀がさらに南へのびる可能性もある。堀囲いの性格についてはいまのところ不明である。

**D期** 現在判明している遺構は発掘区の西側三分の一の位置にあるSA16-Aのみである。この堀は北端で東に折れ曲がる。東側の畦畔下にSA16-Aと平行する堀の存在も考えられ、今後の検討課題である。

**E期** 発掘区を三分する位置に二条の堀SA05とSA16-Bがあり、その外側に平行して石組の溝SD06とSD18が設けられる。園池SG5800と堀SA05との間、および堀SA05とSA16-Bの間は建物等のない空地で、SA16-Bの西側に西向きの建物SB20が配される。

**園池SG5800** 発掘区東端において園池SG5800B西側の汀線を確認した。また発掘区の東南隅では園池西南の池尻からの排水施設SD

5850とSD 02を検出した。これらはSG 5800Aにともなう施設と考えられ、現在のところそのとりつきの状況は不明である。

SG 5800 Bは発掘区の中央部で東側に張り出す岬を形成し、西南隅部は大きな円弧状を描いておさまる。岸にやや大粒のバラスを敷くが、よく観察すると途中から粒の細くなる場所があり、その境界辺には汀線に沿って要所に奇石を配している。このあたりが水際となるのであろう。

### 大垣・堀地部分

大垣の本体はすでに削平され、その基底幅や構築状況についての手がかりは得られていない。その北側雨落溝については部分的に保存のよいところがある。雨落溝の底は西端では上端の水平な河原石を敷き、東端ではバラス敷である。東端では二時期の石敷溝があるので、バラス敷を時期による仕事の違いとみれば、少なくとも2回の改修工事があったことになる。

大垣南方地区では平城宮の外濠（二条条間大路北側溝）を検出し、その北側の堀地部分では建物2棟と堀3条を検出した。外濠は現在検出しているものより北側に一時期古い溝の肩があり、ある時期に堀地の幅を広げているらしい。建物SB 25と堀SA 26は、この古い溝の埋土を切りこんでつくられている。SK 29は平安時代ごろの井戸の可能性はある。

### まとめ

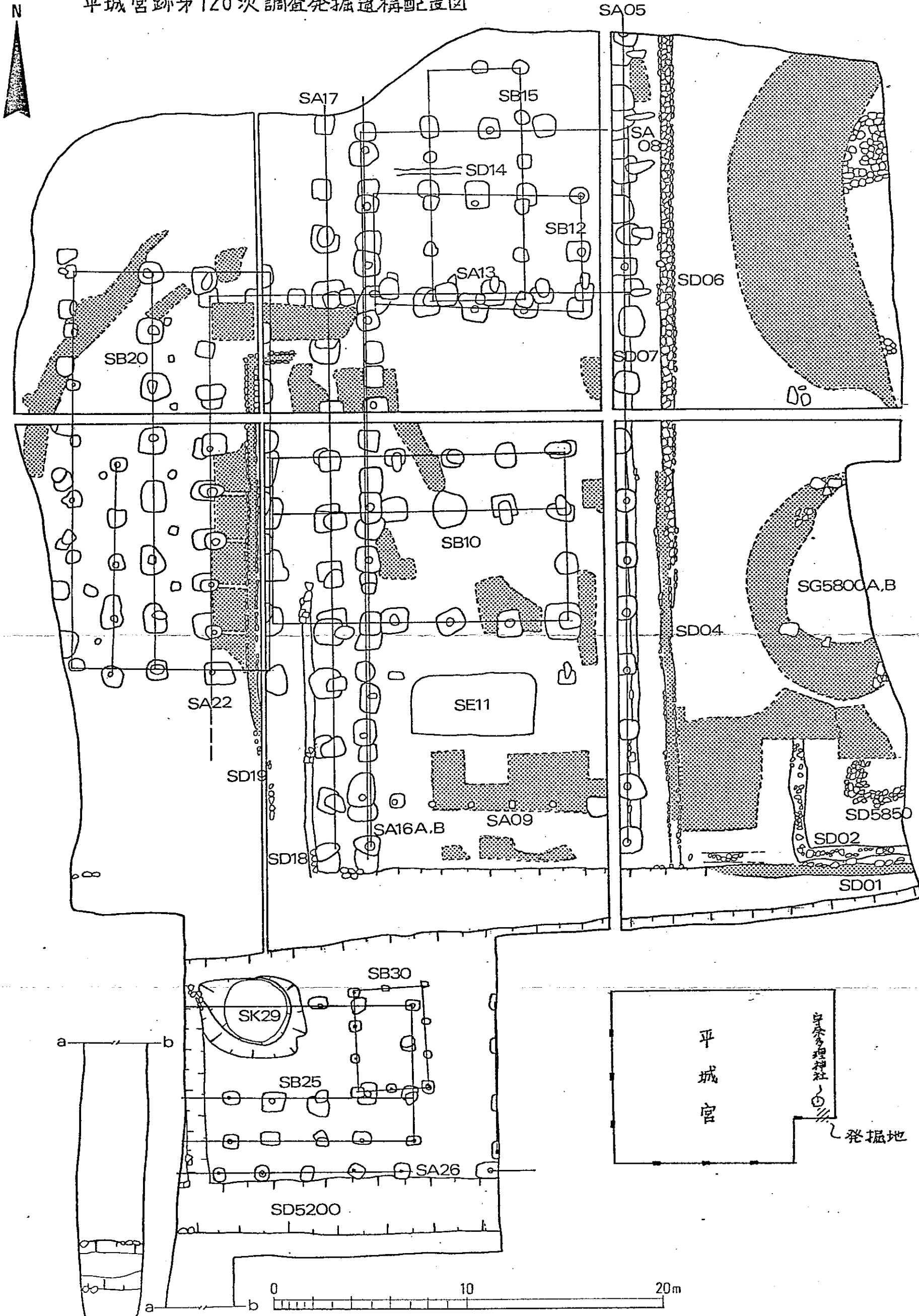
調査は現在進行中であり、最終的な結論は調査完了をまって検討しなければならないが、現段階において知り得た範囲の事実と今後の課題をまとめておきたい。

園池5800 Bは今回西側の汀線を検出したことによってその規模が確定した。これによれば東西最大長60m、南北最大長57mで、面積は約1500m<sup>2</sup>となる。また排水施設SD 5850とSD 02が上層池のものでないことがほぼ明らかとなり、これによってSG 5800に上層と下層の2時期があることが確認視されるに至った。下層池の開き時期、上層池の改修時期と西岸の建物配置との関連は、今後の課題であるが、比較的配置の整備されるE期頃を池の改修と対比させて考えられるのではなかろうか。

園池西岸地区の性格づけについては、遺構の様相に園池の西側を区画する性格が強く出ていることが指摘される。ここで検出された南北の堀は、園池の西側を画する堀と考えられ、110次調査の成果とあわせて東院庭園地区の範囲がほぼ明らかになり、今後東院全体の配置計画を考えていく上で重要な手がかりとなる。

時期	遺構番号	規模	及び 特色
A	SB 10	5間×3間	(15 m × 9 m) 北廂付東西棟建物
	SB 24	7間× 間	(21 m × m) 南北棟建物東側柱
B	SB 12	4間×2間	(10.18 m × 6 m) 東西棟・方位やや振れる
	SA 17	13間以上	(39 m) 掘立柱堀
C	SA 08	4間以上	(12 m) 掘立柱堀
	SA 22	東西8間	南北9間以上 (総長39 m) 堀囲い
D	SA 16A	17間	(21 m) 掘立柱堀
E	SA 05	14間以上	(42 m) 掘立柱堀, 柱根残存
	SA 16B	12間以上	(36 m) 掘立柱堀, 柱根残存
	SB 20	7間×3間	(21 m × 10.2 m) 西廂付南北棟建物
	SB 21	5間×1間	(15 m × 4 m) SB 20の足場穴
その他の遺構	SB 15	5間×2間	(12 m × 4.8 m) 南北棟建物
	SB 25	4間以上×3間	(9.6 m × 6.9 m) 南廂付東西棟建物, 柱根残存
	SA 26	6間以上	(14.4 m) 掘立柱堀, 柱根残存
	SA 27	3間	(7.2 m) 掘立柱堀, 柱根残存
	SA 28	5間	(9 m) 掘立柱堀, 柱間不揃
	SB 30	3間×2間	(5.4 m × 3.6 m) 南北棟建物, 柱根残存

平城宮跡第120次調査発掘遺構配置図



平城宮

皇宮庁

発掘地